

未知という名の宝物

貴方は、旅で常識が塗り替えられた経験があるだろうか。

私は20歳の冬、初めて一人旅にでた。宿泊するゲストハウスの予約だけ取り、日本円で5万円ほど握りしめて2週間、韓国へ渡った。ノープランだった。初めての海外一人旅から学んだことは、キムチの美味しさでも朝鮮語でも無く、型にはまらぬ絆の存在である。

「人との出会いを大事にせよ」と言えば、そんな事知ってるよ、という人もいるだろう。

しかし、ここでいう「人」というのは、親や恋人、親しい友を指しているのでは無い。本書の表題である「弱いつながり」のことだ。

旅の10日目、私は倒れた。40度の熱。インフルエンザだったらしい。更に運が悪いこと

に、連休で、近くの病院全てが数日間も閉館
されているとのこと。正直、死ぬと思った。
しかし、翌日、ゲストハウスの住人たちに
私は救われた。片端から病院に電話を掛けて
休日診療を行っている所を探し、片道1時間
かけて診療可能な病院まで私を連れて行って
くれた。看病もしてくれた。ゲストハウスの
皆と親しくなっていたことが命綱となった。
身寄りの無い地で、出会って間もない人々に
こんなにも親切にしてもらったのは初めてで、

心から感激した。日本はおもてなしの国と言
われているが自分が思っている以上に海外の
人も親切で温かいと学んだ。
本書では、このような弱いつながりが、人
生において、いかに重要かを教示してくれる。

批評家、小説家、そして哲学者でもある著者
の東浩紀氏が読者に訴えかける「旅に出る」
ことの意義。それはまるで、未知なる遭遇に

怯えることで単色化した日常に、「新たな色
を付け足すように」と背中を押してくれる温
かい手のひらのようだった。
また、この体験談は私の旅の例に過ぎない。
貴方が旅に出て偶然に出会うものや、感じる
こと。それらは貴方だけに与えられた唯一無
二の財産だ。言葉にできない感動や、翻訳で
きない言葉がこの世には無数に存在する。だ
からこそ実際に身を偶然に晒すことで未知な
る発見に遭遇するべきだ。旅とは、紛れもな
い未知の連鎖である。決して、大掛かりな旅
に限らなくて良いと思う。降りたことの無い
駅で降り、直感で入ったラーメン屋が絶品だ
っただけでも、昨日の貴方はもうどこにも居
ないのだ。この本を読み終わる頃、きっと旅
に出たくなるだろう。貴方にとって一生忘れ
られない冒険のきっかけとなりますように。